

昭和三十六年五月十四日 塾創立六周年記念式典

「祝辞」

元衆議院議長・元文部大臣 松永 東先生

ただいま御紹介にあずかりました松永東であります。今日は本当にすがすがしい気分になって、皆さんの顔を先程から拝見致しております。ちようどこうした青葉にとりかこまれた、しかもこういふ立派な講堂で元気に満ちた皆さんのお顔をながめながら、じつとさつきから坐っておりますと、私自身がもうこれで七十歳になるが、ちようどあなたがた時分のありし昔のことが臉に浮んで来る。私だつて生れてからすぐ爺さんではない。あなたがたみたいに澁刺たる元氣を持った青年時代があつたので、紅顔の美少年ではないかもしれんが、そういう時代があつた。

私は先程来考えておるんですが、実に月日のたつのは早いものだ。この和敬塾が開設せられました時であつたろうと思ひますが、私はこの講堂で祝辞を述べたことがある。それは私が文部大臣当時であつた。いろいろ話はうけたまわつておる。

それは前川先生が相当の金持階級の人だと

いうことをうけたまわつたが、しかしそれが青年の育成に力瘤を入れておられるということ、その当時から知っておる。しかも私も母校である早稲田には非常な力を寄せていただいていふことをうけたまわつて、特にここに参りましたところが、ほとんどこれは日本しかない、世界に類例のない立派な塾が開かれていふ、そうして元氣に満ちた将来性を持った青年の人々が沢山塾に入つておる。

私は何ともいえない氣持になつて、そこで祝辞を読むときに、文部省の役人が書いてくれた祝辞をここで読みかかつたが、こんなものが読めるかいというわけで、その祝辞を投げ捨てて思ひのままを皆さんに訴へたことを今さらのごとく思ひ出すのです。

それというのは、私が早稲田時分にこの坂を上つたり下つたりして学校に通つておつた時分を思ひ出すんですが、その時分に、こりや少しどうも話が俗に流れすぎるかもしれないが、相馬御風が作ったといわれておる、その時分のな

んというか、あれは詩ですかねえ、「おいとさ おいとさ」といふ節がありましたよ、「早稲田よいとこ目白をうけて 真風恋風そよそよ」といふ歌が思ひ出されます。そういう歌を口ずさみながらこの坂を上り下りしたことを思ひ出す。それを思ひ出しながら祝辞を述べたんでありますから、こりやもう脱線はもちろんなことでした。しかも一面において前川先生がこういふ立派な塾を作つてそうして将来民族の中堅になつて働く青年を養成していかれる。私は本當に感激した。しよつちゆう、一遍塾の内容を見せてもらいたいと思つて、二、三年前からおつたのである。今日、はしなくも記念式があるからということをうけたまわりまして、とんで参つたのであります。

月日のたつのは早いものじゃ。六周年、まことにこうして塾を作つてもらつて、そしてあなたがたのような立派な青年を社会に送り出して、いや日本民族の中堅、そればかりじゃない、世界人類のための中堅として活躍していただ

くように力瘤を入れていただいております。北村先生、前川先生にまことに頭の下がるような気がする。

私は昨年オリンピックの問題でローマに参り、さらにロンドンやパリ、ジュネーブやベルリンあたりずっとヨーロッパ各国を廻つて来た。そうして、もともと教育畑で苦労した私でございますから、オックスフォードにも行きケンブリッジにも参り、いろいろな学校を見て参りましたし、その宿舎あたりを見て参りました。この宿舎は世界のいずれの宿舎に肩を並べても引けは取りません。私はこういう宿舎を作つて本当にさつきも申し上げた通り立派な青年を育てあげていただくことに頭が下がる。

ことに今度、塾長になられた北村先生は私の生まれ故郷の長崎県を選挙区にしておられる。したがって御懇親をずっと長いこと結んで参りました。これは私の先生ですよ。こういうあなた方は「爺さん、おまえより北村先生塾長さんは若いぞ」ところおっしゃるかも知れない。そうじゃない。私より年上です。なるほど顔を見るとというと私の方が「爺さん」に見える。北村先生はずっと若い鑢鑢（かしやく）たるものだ。それが何が原因しているかというところ、これは餌の関係である。私は貧乏育ちで、貧乏で暮らして来たから、しかも貧乏弁護士で今日まで暮らして来たから、いい餌にありつけない。経

済界の立役者として北村先生、相当な滋養物をとつておられるにちがいない。そのことを考えるとあなた方は非常に恵まれている。我々の時は小学校に行つても給食というものがなかった。今日では給食があつて、家では貧乏暮らししていても、学校さえいけば滋養物をたくさんとつて、カロリーとかなんとかいって理屈をつけてな。であるから、ぐんぐん背まで大きくなる。去年ローマに行つて見ても、世界各国の選手と比べてみても、体格・体力の上からいうと引けはとりません。しかも、あなた方はこういう立派な塾舎で、うまいものを沢山食べて暮らしているんだらうと思ひます。

私は立つたついでに皆さんに一言なにか訓育めいたことをいうとお笑いになるかも知れないが、私の体験に基づいたことを一つ皆さんのお耳に伝えておく。それはあなたがたが如何に精出して勉強したかせんかによつて、あなたがたの地位やあなたがたの社会に対するその貢献する力がずつと天と地との開きになる。今では兄たりがたく弟たりがたし。「おい松永君！ おい木下君！」とやつて、これがあと十年十五年二十年たった時の社会的地位はずつと勉強した人としなかつた人間とでは違つて来る。

私は九州から東京にとび出して来たのは貧しい百姓家であつた為に大学なんかに入れない

いと親父はいうので、何が何でも俺は百姓はいやだ、大学へ行く。そうして実は田舎をとび出して来た。したがつて学資がないから今でいえばアルバイトであるが、その時分は書生奉公ちゆうやつをやつた。これはもう古い昔のことです。それから名前をあげすけに申上げてもよろしいが、その時分、伯爵、華族ですね、公侯伯子男なんて昔ありましたよ、大木遠吉という伯爵の家で私は書生奉公をやつた。かつて大木伯は鉄道大臣になり、司法大臣になられた。その伯爵の家に私は奉公を致しておつたが、その時に今は故人となられたから名前をいってよろしいが、斎藤という書生がおつた。その斎藤と同じ部屋に二人でおつた。年は同じくらいであるが、私はあとから行つた新参者だから、斎藤センセイが私を使うの使わんの、「おい松永、たばこ買って来い、下駄買って来い、床敷け」。おっしゃるままに、これ命、これ従つておつたんだ。彼はどこだったかな、やはり夜学校に行つておつた。私もしかたがないから夜学校に行つた。日本大学の夜間部に入った。そうするというところ、そのうちにその斎藤君は、こりやまあ変な話だけれど、なにかあとで聞いた話じゃが、その屋敷の女中となんとかして、夜逃げしちやつたんだ。四、五年たった後、私は司法官試験に及第して弁護士になつた。そうするというと大木伯爵のうちに私がおつた時に可愛がつてくれ

た三田の徳川伯爵が、松永東が弁護士になった
 そうだから事件を頼みたいというので、華族会
 館に來いという話だった。早速私は自分の家に、
 その時分自動車がないから、人力車にのって、
 その時分にあつた華族会館は日比谷公園の前
 今の勸業銀行のところに黒い長屋で門があり
 ました。そして私は事件の依頼をうけて帰りか
 かつたけれども、この私の人力車夫は空襲なん
 だ。玄關番が呼んでもどうしても出て來ないか
 ら、仕方がない、私はとことこ供待部屋、入り
 口の部屋で股火鉢にあたっていた。そこへいつ
 て、「おい、四郎、帰るぞ」といったところが、
 その四郎と二人で火鉢を囲んで饅頭笠をかぶ
 って話をしている車夫がある。私の顔を見たこ
 ころが、「ああ、しばらくでした」といつて饅
 頭笠をとってお辞儀をする男がいる。見てみる
 と、それが四、五年前、私を顎の先で使ってお
 った書生の齋藤君じゃ、車夫になっていた。「お
 お、齋藤君じゃないか、たまに遊びに來いよ」
 ぐらいなことをいつて私は帰った。その後、ち
 つとも消息がなかったが、それから四、五年た
 つてでありましようか、今もあります大曲のと
 ころに私の事務所があつた。あの事務所のとこ
 ろへ齋藤君という人が用があるといつて來て
 いる。上にあがれといつてもありません。玄
 關でお目にかかりたいというから、それではと
 いうので玄關へ出て來てみたところが、かつて

の今話した齋藤、その時分はもう饅頭笠でない、
 背広の服でも着ておつた。「なんじゃね」とい
 ったところが、実はこれこれだといつ話を聞け
 ば、深川にある府立第五女学校といつていまし
 たかな、その女学校を彼の娘が受けた。ところが
 が、これは小学校時代ずっと一番ばかりを通し
 て來ておつたが、びりの人が入つて一番の私の
 娘がおちてしまった。偉い人から一口、口をき
 いてもらえば及第ができるといつ話をきいた
 から、とんでやつて來たんだが、先生なんとか
 やつてくれ、といつ。「よろしい」といふんで、
 その時分私は東京市会議長、ではなかつた副議
 長でありました。すぐとんでいつて、そして校
 長に話をした。校長さん「よろしゅうござんす、
 あんたが引受けるというなら入れましよう」ち
 ゆうわけで入れてくれた。二、三日たつてから
 齋藤君が私の留守の時、なんだか私のところへ
 ちつぽけな折箱を持ってお礼といつて來たよ
 うだ。それつきり会わない。今もつて会わない。
 さあ、皆さん、こじや、話は。これは齋藤
 だつて馬鹿でもなんでもない。頭が相当あるよ
 うだ。しかし一生懸命やつた松永東、こりや、
 私のことを自己宣伝するようではなはだ恐縮
 であります、例に引いたわけで、一生懸命や
 った松永東は弁護士試験に及第して弁護士に
 なり、東京市会議員になり、東京市議長も十
 年間やつておつた。衆議院議長になり、文部大

臣にもさしてもらつた。怠けた齋藤君は車引き
 になつてしまった。車に乗る身分と、車を引か
 んけりやならん身分となつた。今でいへば、ニ
 コヨンをやらなけりやならんような身分に落
 ち入つてしまふ。これは一生懸命強しろうとい
 うんでない。あなた方の今の年、大学卒業するま
 であとたつた五年間、一生懸命やつた奴と怠け
 てしまつてずるけた奴との違いは、天と地との
 違いとなる。すなわちその人はもちろんのこと
 お父さんやお母さん、さらに兄弟の人々や、御
 親戚一同も、やはりその成功した人を中心とし
 て明るい生活ができてゆく。
 でありますから、長い間、一生懸命苦勞してく
 れとか、一生懸命強してくれとか、あんた方に
 私は言うんでない。たつた五年か七年間、「よ
 しました、松永東という奴がこういうことをい
 よつたが、俺も一つやつてみる」といふんで一
 生懸命机にかじりついて、勉強して見て下さい。
 必ずやその効果は一生懸命のうちに、大きなひら
 きとなつて現われて來る。私はこれをあなた方
 にいいたい。で、そうするにはこんな立派な
 塾に入つて、そしてスポーツもいろいろ設備し
 てる。どうだね、私は今でもテニスをやつて
 いるよ。一遍あなた方にテニスなるものなり、
 やつてみようか。今日でもよろしい。そのくら
 いな、やはり運動にもスポーツにも関心をもつ
 て、一面において身体を鍛えながら、そうして

暇さえあればみっちりひとつ机にかじりついて勉強する。そして予定の学問を立派に仕上げたほしい。若い時は二度ない、と昔からよく諺にある。その青年時代に勉強しはぐつたら、もう、わしみたいなの老人になってから、あああれも修得したかった、これも少し勉強しておけばよかつたなんて、いくら考えてみたつて遠くおよぼんこつちや。

どうぞ皆さん、こうした立派な塾に入っておられて、こうした立派な先生、北村先生はさっき「私は塾長なんかはいやだった」とこういわれたが、いやでもあろうが長だ。長と呼ばれるものを、そうおろそかにするものではないですね。もつとも面疔（めんちよう）や盲腸（もうちよう）はこりやいかん、この塾長になられて、そしてこれだけの立派な有為の青年を育てていただくということは、こりや大きな社会事業であり、大きな人類のための仕事であると私は考える次第であります。

どうぞ皆さん、先生方にも、前川理事長はじめそういうお気持ちで先程から私はうけたまわっておった、あなた方を立派な人格者に育てあげて、世界のいずれの民族にも引けをとらない、おくれをとらないような日本民族の中堅にしようという、この熱意、このお心根を、あなた方は本当に無にしちやいかん。一生懸命これに応じて、今申し上げたように勉強せられて、そ

してこの和敬塾から博士の群が沢山出、あるいは大実業家ができて、そして全世界に雄飛する人が続出するようにひとつ精出していただくことを切にお願いいたします、私の祝辞とする次第であります。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。